

市民農園の質問箱に対する回答

市民生活部農業振興課

農園名	<input type="checkbox"/> 北中沢 <input type="checkbox"/> 東道野辺 <input checked="" type="checkbox"/> 西佐津間
氏名	■■■■■■■■■■
質問日	令和 4年 7月15日
質問内容	<ul style="list-style-type: none">・石灰の種類と用途・堆肥の種類と量<ul style="list-style-type: none">・堆肥を入れる必要はあるのか・入れる場合、タイミングと量・堆肥の種類で何が違うか・肥料の種類と量及び施し方・「アリ」が多いが、どうしたらよいか。
回答者	<input checked="" type="checkbox"/> 鎌ヶ谷市農業士等協会 <input type="checkbox"/> 東葛飾農業事務所 改良普及課 <input checked="" type="checkbox"/> 鎌ヶ谷市農業振興課
回答日	令和 4年 9月 8日
質問区分	堆肥、肥料、害虫
回答内容	<ul style="list-style-type: none">・石灰の種類と用途 日本は雨が多いため、土の中のカルシウムが流れていき、酸性になりがちです。一般的に野菜は弱酸性の土壌を好みますので、酸性になるとうまく育ちません。（農業振興課課発行の「市民農園の手引き」14, 17ページ参照） 石灰を使う理由は、「酸性土壌の中和」と「カルシウムの補充」です。 肥料の3大要素は「窒素」「りん酸」「カリウム」ですが、その次に必要なミネラルがカルシウムです。カルシウムは細胞壁の原料となるため、成長点や根の先端など細胞分裂が盛んな部分に使われます。 「石灰」には「消石灰」と「生石灰」があり、どちらもすばやく酸性土壌の中和を行います。与えすぎると生育障害が起きたり土が固くなってしまいうため、注意が必要です。 市民農園のような家庭菜園では、カルシウム源として牡蠣殻等を原料とする「有機石灰」や草木を燃やした「草木灰」をお勧めします。「消石灰」や「生石灰」ほど効き目は早くありませんが、失敗も少ないようです。 「有機石灰」の場合は、使用量をパッケージに書いていることが多いので、それより少なめで入れてみます。足りないのを追加するのは簡単ですが、多すぎたとき抜くことができないためです。追加で足すときは「草木灰」を株元に置くようにするとよいでしょう。・堆肥の種類と量<ul style="list-style-type: none">・堆肥を入れる必要はあるのか 結論から申し上げますと「必要あり」です。堆肥を入れずに化学肥料のみで耕作すると、土が固くなってきます。土が「団粒構造」になると空気を含みフカフカになり、隙間に水も入って植物が根を張りやすくなりますが、化学肥料はこの団粒構造を壊してしまい、植物が育ちにくくなってきます。

・入れる場合、タイミングと量

堆肥は植え付けをする2週間くらい前に入れよく耕し、土となじませておきます。入れる量ですが、植物性堆肥は1㎡あたり2～5kg、動物性堆肥の場合、牛や馬ふん堆肥は1㎡あたり2kg、鶏ふん堆肥は0.5kgが目安です。

・堆肥の種類で何が違うか

上の回答で出ましたが、堆肥の種類には大きく分けて「植物性」と「動物性」があります。植物性は植物の残渣（稲わら、枯草、落ち葉等）を原料として発酵分解させたものです。動物性は家畜等のふんや漁業で出る魚の残渣などを原料として発酵分解させたものです。

動物性でも牛ふん・馬ふん・豚ふん・鶏ふんで成分や効き方が変わってきます。馬と牛は草を多く食べていること、畜舎に敷き藁等を使うため、堆肥に植物成分が比較的多いため、植物性堆肥と同じくらいの量を使っても大丈夫です。鶏ふん堆肥は牛ふん堆肥に比べて植物由来成分が少ないので、肥料として考えたほうがよいいため、少なめに入れます。

植物性堆肥は土壌改良効果が期待できますが、肥料成分があまりありませんので化学肥料または鶏ふん堆肥と併せると、フカフカで肥料分たっぷりの土になります。牛ふん・馬ふん堆肥は肥料分がちょっとある植物性堆肥といったイメージで使うとよいと思います。

・肥料の種類と量及び施し方

肥料は「肥料取締法」という法律で販売できる肥料が限られています。

大きく分けて「化学肥料」と「有機質肥料」に分けられます。有機質肥料は上で説明した堆肥のことを指しますので、こちらでは説明は省略します。

化学肥料には成分が1種類だけの「単肥」と複数の成分が含まれる「配合肥料」に分けられます。単肥は土壌診断で足りていない成分を補うのに使い、家庭菜園などではバランスよく配合されている配合肥料を使うと便利です。

化学肥料の成分として代表的なのは「窒素（N）・りん酸（P O）・カリ（K）」で、植物の生長に欠かせません。それ以外のマグネシウム（Mg）等が含まれている配合肥料もあります。

化学肥料には効き目の速さで「即効性」と「遅効性」があります。元肥に遅効性のものを使えば、年に何度も肥料を与える必要がありません。育てている途中で足りていないと思われる時は、即効性の肥料をあげるとよいでしょう。

肥料は土の中に入り込むと取り出すことはできませんので、最初は控えめに入れ、足りなければ追加することを守れば、失敗が少なくなると思います。

量は肥料の説明にある量を守ります。たくさんあげたらよく育つということはなく、あげすぎると肥料焼けを起こし、根が育たず、枯れる原因になります。施し方ですが、農業振興課発行の「市民農園の手引き」の14～17ページを参考にしてください。

・「アリ」が多いが、どうしたら良いか。

アブラムシがいると、アブラムシのおしりから出る「甘露」を求めてアリがくることがあります。その場合、アブラムシを退治することでアリもいなくなります。

アブラムシの退治方法として、薄めた牛乳をスプレーボトルにいれ、吹きかけます。牛乳の油分がアブラムシの体表をコーティングして呼吸できなくなり、アブラムシを退治します。野菜についていた牛乳はアブラムシを駆除したあと水洗いします。

アブラムシはおらず、アリのみであれば、薄めた木酢液をスプレーすると匂いを嫌うのでいなくなります。砂糖と重曹を混ぜ少量の水でこねて作った団子を巣の近くに置くと駆除できるようです。

畑に薬剤を蒔くのは嫌だと思いますが、市販のパッケージに入っているアリ用薬剤（商品名：アリの巣コロリ等）を巣の近くに置くのが一番効くようです。